

日光驛程見聞雜記

ル 4
993



蘇州府志

卷之四

武進縣志

七

門凡
號 993
卷

天保癸卯新刊

日光驛程見聞雜記

聿修堂藏版



玉井の道はもとよりとあるが貫之の
土佐日記菅原の孝標の女は史料日記とある
却る由も陸奥親成なる旨は行末の紀あり
しとあるにりるへりのあるは水活程とあり
村里の事ありとあるは人々の事なるに今人の
世に於てはその地は新なる人の枝折るなりとある
古風ある流もなりとあるにその事あるは流ありとあり
文のいふところにはあるにすいふあるに人々の
のりり人々の事なるにありとありとありとありとあり

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

沂山に着ぬ

王の尊恙も漸平愈なりしに二月五日にハ歸府に畢ぬ是日日光に玉るの初なり其後享和二年壬戌同三年癸亥兩年とも九月に

台命を蒙りて

王の駕に從りされハ其度くは驛程の間は於て見し事同一事漫に記して草本のまゝ置けり

然るも初度ハ悲傷の念やまさまじハ筆を把るに慄し僅に漢程の里数などを記し過さるるの兩度ハ稍心を用ひて訪搜せり依て癸亥に記る本を繕写して一冊として名つ々て日光驛程見同雜記として壬戌に記し岩槻街道亦を附録とて道中甚嚴にして唯街道を直る所のこなきハ驛を昇る脚夫又ハ

夜の旅舎小休の店主なりとて予本朝の書籍
事斗りなりまゝて予を廣く見ふれハ少も考ふる不阿ま
も疎謬少なかるまゝ一閑游の士は冊を
携へ記し置る名勝舊跡ハ元
記し洩しる地も親しく道
遥して面のわづりハ歴覽し謬を
匡し闕るを補ひ深く冀ふ不也

享和三 癸亥九月

七日

朝七半時頃和泉橋の宅を出五時過
王駕は従ひ東叡山を發と

千住 草加へ二里八丁と公の住ハ我阿まとも実ハ
三里四丁なりと脚夫ハ一川原三町掃部宿立

徳廟侍藝の茶舎ハ宿の北の入口西側ハ阿ま今ハ床
の上ハ注連を張り並て茶舎茶屋とす

梅田 嶋根 六月村 保木間村

け多多く秋葵を園圃ハ裁並たり長け甚短
花盛なり何故ハかくハ矮短なりと問へ

幾度も刈取て紙を抄く祓り用ふと土人のいへり湯根の安穩寺ハ往還より西二丁斗りより日蓮宗よても願三十石

清成の節清猪不となる

保木間村ハ榎一本道傍ハ阿里埒を以て並々り首縊り板本として兔角縊死人多しを以ハ白山権現ハ祠りてこもほハ止ぬ齒痛の額をかきまハ能く愈とて多く繪馬をうけ並より

ほさきの西の田中ハ菰蒲の生る池あり水神ハ池といふ昔ハ大なる池なり今ハ漸く徑り六七間も有る一とされといふ所の小名となりしる也小田原北條の時の不任役帳ハ千葉及三拾貫文伊奥村拾五貫文保木間村とありさきとほさき以て色ハ子葉ハ成りしと見ゆ子葉ハ武州赤塚ハ住を練馬の西一里斗り先ハ城跡あり行の塚ハ不竹塚と唱ふまともほさる村なり竹塚ハ半道西ハ氷川明神社ありけ内神保木

間伊與竹塚の鎮守なりけり即ち竹塚也
けり下の亀屋と云ふ系やの向はる井戸の名水
なり昔は下は竹塚後と云人なり関東津入
國の砌竹塚浪人多うりしと傳へるも或
人の物語なり小糸家の被官よてもなりし
よや猶考ふへし是より西へ二十町程入る八塚
村あり一叢の樹林の内は塚ハツも三間四面充
もなりし今ハ四ツなりてハなし源義家朝臣
奥州より凱陣の節は下よて暫く在陣あり

て旗幟など八種の武器を塚に築しとたり
同村の内伊與と云ふ下は應現寺と云時宗の
寺あり菅神觀音の二像ハ義家朝臣安置
し下也と云菅神ハ半身朽失り又應
現寺と云ふ聖武天皇の勅額并義家朝臣の
馬鞍あり竹ともさたうなり昔ハ大寺よて三
草加十六坊ありとたり又草加の東はる多の
町鷲大明神ハ新羅三郎義光在陣ありし
下よて即ち義光を記ありと云八塚村の森林ハ

往還よりも見ゆ

手先村 手白村

草加

越ヶ谷へ二里廿八町
十二町 公へ六丁と申す戸五百

六町目搦 宿のつまより

浦生 及傍の東より
後氷川流る 上り戸

川原曾祢

越ヶ谷

粕壁へ二里廿八町 宿の中程の搦を大沢搦と云ふより
北を大沢と云ふ惣して十九町戸五百

宿の東半里より大相模村大静寺と云真言宗

よてち成七石のち何り本寺不動ハ良辨僧都

作よて相お大山の不動と同作かりとて縁日ハ

と末宿羣集ととかり

古河の成氏と上杉越ヶ谷よて合戦ハ

事山中々中古治乱記よ見ゆ何まの地なりや

大房 尾入ともいふ尾入の某師ハ 大林 大里 上まくり

上まくり 入口の角の葉や多く
ハ赤紅を裁てえり

げ不鰻鱺の名おかり賣店三四軒あり

大枝 大畑 東の方より男体
女体の二社あり 備後 東の方より陰陽寺として
津土家のおもさ成廿名

粕壁

杉戸へ一里半七町
十二町 戸三百

宿の東辺より正八幡の社あり宿の鎮守也

八丁目橋 相壁宿の木の末は有山古利根のまありま成百石境内一里、十六ヶ所の内にて修治の政あり余程君を内室は速へーとかりせよまの着まつれよて大門ハ世をよ出て

堤根郷 三本木 勢

杉戸 幸多一里半八町

小屋塚 こと鴻 上高

して左右の稲田渺くして海くくくとうくくく

幸多 栗橋二里三丁 八町 公一八四丁戸

四手橋 宿の多あはり

降と宗よてち成三十石中幸ハ不病幸なり 比丘

高須賀 古

外古磨 今津の稲荷河

川取

け村の間長一里半余
ハ東は樹林の間より往
西ハ堤上灌莽の間は村
まきく富士を見る景色
粟餅の名物あり

栗搗

中田へ半里
六丁戸四百

宿の末房川の縁り西の方より清閑河あり
房川の渡半里より準と川のほとり川原たよ
三百間よりして則利根川也

宿の西十町程入りて伊坂の内室治戸とよ
あり静の墓平の杉の大木あり静は前美
経の阿とを逐ひけりあり奥の寺館にて
戦死とてつて像は病て死するを葬りし
となり其下は一言の宮とて小さきほこりあり杉

る六丈七尺張り十五間圍二丈三尺今年五月
関東の郡代中川飛弾おは眞を捐て寺を
石より勒して樹下より立となり

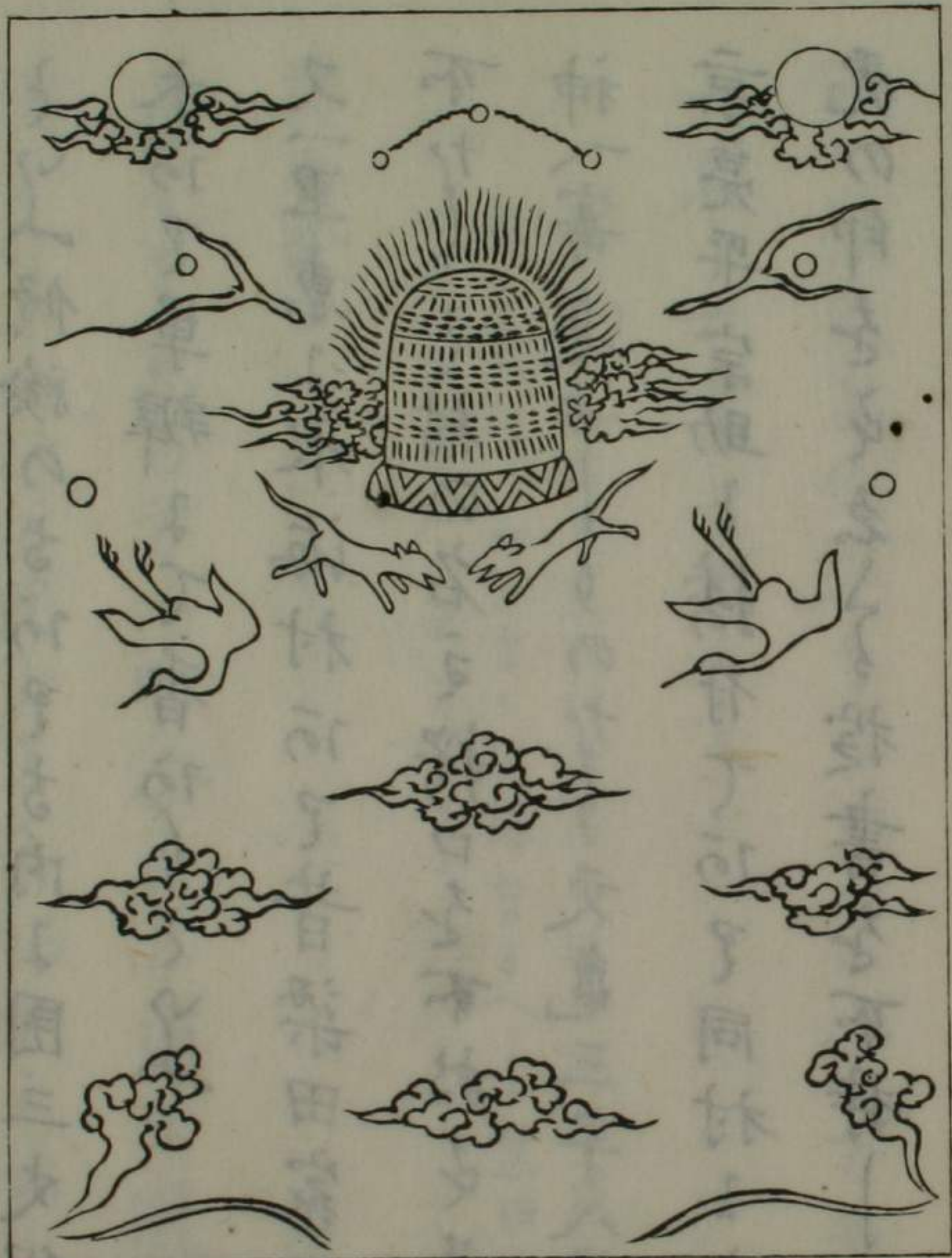
中田

古河へ一里半下総は葛飾
郡なり戸百餘

宿の入口東の方より八幡香取両社合殿あり
其の多居より一町余も入るは社有神ありて
くたふと昔ハ川のおよありて瀬替りて今
ハ爰に移りて也又宿の中西の傍より岩松山聖王
徳院光了寺とよ一向宗の寺あり静は其後

静舞衣之圖

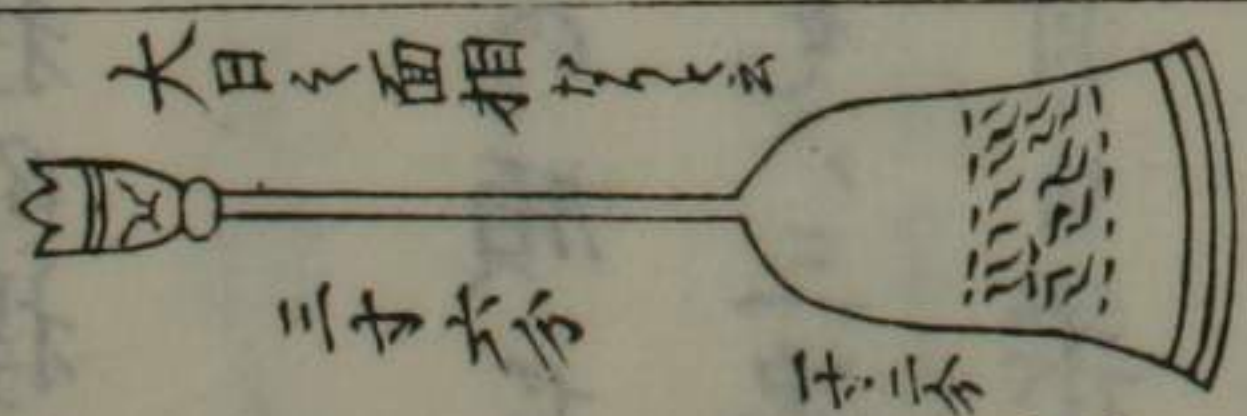
幅一尺五寸五分



丈二尺五寸

外箱ハ近頃白川の少将及寧進セーと云也

地黒く模振ハ紅白種々の糸にて繡あり



弘法大師鈴
銅色甚古
徑一寸七分五厘

雷紋の
如き
はの
こ
の
こ

鳥羽院より賜りける舞衣を裁ち地ハ紗の
こゝろにて厚く模振ハ緋と切付と両振交り
て至て古き唐物と見ゆ出づり又弘法大師一
千度の護摩子用ゆる鈴ありまゝ美經の本鏡
ニ短刀こそ外箱室何れ詳よもの縁起見ゆ

予は取らば至りて笑へきのまきりあり門生を昇る禱丈
の物語は栗栴の栗の字ハ栗ともよむ也一栗栴ハ栗取の
名おなりといへるも門生笑て予は禱るを程は是よりま
かましは住僧の静の墓ハ川向なる室治戸といふ所ハ
ありといひし由も文字を合はほうハむろとも又たうた
読字なりといふも字字にてハ室室は作る也一かくハ
云いかん禱丈の栗栗同字とふはうらハことなり

宿より東の方一里くゞむ大山と云ふは大光院
と云ふ修験の寺あり寺内は圍三丈程の櫻の大
木あり單辨にて香ありと云ふ

又一里東は水海村あり昔梁田家の願せし
不かりそ村の名は銚口を不持と見は三鴻明
神へ寄進せしりのかり文龜三年八月日梁田右
京亮平宗助と鑄付てあり同村は小桑氏直ら
虎の印をよるゑし控書を不持しゝる百姓有
惣してけさしは梁田家の長下の子孫多しけ

不の名るを齋の茶を賣る奇孫源太左門も先
祖は彼の家の老なり梁田は五十万石程願せし
大名よて有るゝと云ふ

素より右京亮宗助は康正の以古河の成氏に属し上
杉と戦ひし出羽さう子孫なるへし梁田は関宿の城に
なり五十万石と云ふ

茶屋新田

是より東の方十町余りハ南は逸見村と大
堤と云ふ兩村の間は上ありありと云ふ
静内おの思案橋と云ふ静美經の跡を慕ひ

け下り来り奥州へゆんやゆんやく思案は
 不なりとつひ傳ふ嘉暦七年古河の弘法
 加持水なりと奸民をつとひ江戸そ外近國
 より京詣羣集し水は活して難病多く
 無きなりなとかまひをく傳へるはけ土橋の下の
 水にて何と方もなす空云て何りしと也
 大堤は鮭延寺とつふ寺あり最上美光の臣鮭延
 越あつ為に建し寺なりそ内は鮭沢了海
 墓も何り

湯浅氏の常記述は鮭延越あり最上美光の長臣祿一万五千石
 なり最上家滅亡の流落したるは素より家人意を承りり
 人して士二十人属後し各乞食して養ひんとつふ土井大炊利
 務五子石子一々れは二十人の士は五子石皆与へて各二百五十石
 かりそ身は二十人の許は一日かりり養ひて一生を終越あ
 死むまは二十人の家人大に愁傷して一字を建立を今
 下野の古河大堤村の鮭延寺と名なりり素より鮭延本ト出羽の地
 名なり古河ハ下総の葛飾郡の内なり下野ハ何れ
 記述は又云鮭沢次郎ハ伯継元祿四年八月十七日松平日向
 伝之古河の城彰政郭に病死し城下の大堤村鮭延寺に
 葬りぬ年七十三

中田の宿の末より往還の左右は松並木歩道
 街道廣く甚平なり東海道にもかゝる松
 原の直は往還の平は亭藤なるハなりしと也

古河

野木へ廿五町十七丁十八間戸四百廿大工町 石町 江戸町 舟戸町
田町 紺屋町城入口辰治町もろく町 南彩町 系町 基町一丁目二丁
目別は横町五丁程あり西の方松系の間より土井及の城
の櫓遙く見ゆ

土井大炊頭及の城ありけ城内は源三位頼政
の杜あり頼政曲輪とよふ外人のし来詣を許さ
し別當文珠院とて年々都下は使僧をな
し祈禱札を吉田侍従を初大河内氏も外頼
政の子孫の家は増るとなり

案よるは関東合戦記よ云下総國下河
巻の庄古河の城は頼政卿の馬弓の師とす

之は下河を名目なり年々代々住る旧館也

城の南東の方よりありて竜う呼と云ふ源
三位頼政の厩あり是は宇治川合戦の時平
常院にて討死せし人なれば何の故よけ不
暮所の有と尋ぬるは頼政の邸ホ下河辺の巻
之郎行吉より者主の口首をかくし法皇修治
の山伏に成て及の中に入て本國に歸りけ所
よ及を置られは則ち首動りて大磐石乃
はなれは扱ひ地は任せり

とてけ殿の迹不かれハ苗不法者ニ被入る
 一とて一社の神ニ向うめり令根幣帛の
 奠蘋蘩蕡藻の礼若そ一更法くせ里さ
 さい名將の冥神かれハ感応神徳日々新ニ
 して苗地ニ凶事所んとしてハ社鳴動を其
 ため掲焉よりけ宮前より菩提樹生
 里け本ハ天竺の冥木として私國ニさるる
 里一ニふ思儀なり一とめりやと今彼の
 土の傳ふる不かくのこも

常陸国志ニ常陸の河内
郡竜ヶ崎の下ニ永亨記

を引く社殿の墓あるをえそ
竜ヶ崎の名ニあて誤りたる也

下河辺氏の代にけ不ニ住る他書るも
 見ゆ去り永亨の頃持氏息春王丸安王丸
 日光山より忍ひ出結城中務大輔氏朝々城
 に入謀反をこし、村廻田右る今古河の城
 二楯蓋るるええて下河辺るるえ何れも
 そほめ何なりけりニヤ洋かるるをそそ別集
古河新設明神の社の款を城川表太まつめり
明神の明の字の月乃筆畫半月ニかきし意ハるる
月の射るるまゝせてとよ名向を思ひ出て書
と自讀せしむるや今もけ款何や

宿より西の方四五町は鴻の巢と云ふ所あり
 古河公方成氏の所不跡と云ふ名のこゝに
 畑にて其形も去れど徳光院と云ふ所あり
 又同じ西の方十四五町は牧の字村あり松月
 院と云ふ所の樹林の内は塚あり上は石塔のこゝ
 あり所不塚なり文字何と云ふを分り
 又宿より十町程西長谷村は養生院と云ふ
 三ヶ寺は禅宗にて何れも古河公方の菩提寺と

古河公方五代なまむね月院の 尊氏義詮 氏満
塚の外は所不塚有るをふか

満兼 持氏春王丸 成氏古河公方 政氏 高基
 晴氏 義氏 頼氏 喜連川之祖也

むかひはけ街道西へよみて塚のありし
 糸抄してまゝい落馬するありて旅人の患
 とある故に街道を今のところよりつ
 となり

素より亨徳五年成氏総州葛飾郡
 古河縣大うのそと云ふ所あり屋形をこゝと

鎌倉大草紙等に見ゆ則け不也

小桑五代記小田系記をこ

る古河の方晴氏の女なり氏康の女なり氏康卒去のち古河は氏康の墓碑を建てる事あり今存するや茲に記して好事の人の彷彿きんるを欲とす号ハ氏康の法号を以て大聖院といふなり

香春斎田代三喜ハ翠竹院道三の師

て世は古河の三喜と称する名医なりけ

地何もの不は住せしやと土人は尋らる

宿の西横町石町とよふ不は住せしとつ

し中せともさうなりと

宿の末松並木の東は皂莢樹西は板木の

は是ハ中総國葛飾郡と下野國寒河

郡と國界の表なり西の方畠の内は荒

塚阿古河城の小思川と云川也け中

は人魚とむと云傳ふと歌也何所の魚なる

よ

野木 和名鈔に勢宜

同く田へ一里サセ丁五丁余戸二百

松系新田 逆サ川 五尺斗りの小橋掛りる川也

野木社宿の入口西の方より居付をへ出ると東

鑑六 文治二年は寒河郡内以田地拾五町被附日光

山三味田の後件十五町を野木宮に寄進あり宿
の東に新野木あり水亦より西に流る小山判官の
遠圃の跡なりと又大平ありと云傳ふ小山の
祇園の城より三里も隔りたるは亦遠圃を設る
ハ其頃の廣さるる思ひあるへし土民の説ハ百万
石を賦せしと云ハ何れも永徳元年鎌倉の氏
満関東十二ヶ國の軍勢を引率して小山を
攻を退治せしと書記にも見ゆれば其強大にて
何れも土民等う云傳ふる如くして

友沼

立場なり是迄下総至古河に於て
是より北ハ下野に於てなり

寒沢

乙女村

赤の方より大なる松林ありめぐり一里有と云西の
方杉並木の大門ありて其深くこゆるハ松竹ハ晴
の社也西に板橋道あり是より不動堂あり

間々田

小山一里廿四町
九丁五十間戸二百十二

東に二里斗あり山川村と云亦に莊現寺と云
寺あり什物に将門の太刀あり又鬼怒川より上
りて不動の像あり蓋繪ありと云鳥居丹
波守の願不なり

千田塚村

西に富士浅間の塚あり久世大和守領不なり

粟の宮

明神往還の末より延喜式神名帳に十社の一阿波の神社とあり是なり神宮寺あり

是より二丁程西の方より藤おと云ふ所より小山
より米倉の跡にて今も畑の土中より焦米を掘
り出るとも又その山より出でて樹木茂りたる所は小
山より時の獄屋の跡なり

二日市

神鳥谷村より

是より西南より森とあるは外城と云ふ所にて
是れ舊大明神の社也昔小山下野より朝政頼
朝より一人の妾を賜りしはそれより後右府の

た神をやとて程なく男子誕生するまゝ

く右府の所子なるとして別の一郭を営み

下より並たり是を外城と云ふ也

小山結城共系
秀郷の子孫なり

秀郷より十一代七孫朝光は朝朝の所子なりと云
朝政養育して成人の後結城の家継せり也

永徳二年

十一月九日小山美政就鳥の城を木戸将監記季

上杉中勢禅助に渡して白昼に三百余人にて祇

園の城に入移ると鎌倉大草紙に見えし是れ舊の

城ハ能登大明神を誅せしは外城の所を云ふ

よや小山の城より外城と半里計りるといふ

小山

飯塚へ一里半大町新田へ一里十一丁主生(三里十一丁
宇敷宮成也十二丁 公ハ六丁上下中丁新丁十丁戸千

宿の西の後の方より杉並木の林あり土人馬場と云是ハ景文

五年の秋

神君奥の景勝少退治の時少陣をめぐれ

頼朝佐竹征伐の時もけ

不ノ陣取られし吉原は倣ハせしと云

世ノ傳ハる小山少陣定之

不なる里支より畑道を引ハ堀の埋ぐる跡杯

あり四五町よりして古城の跡へ出る小山より祇園の

城より四十七ヶ所の堀を掘ぐる所は堀といひ

ぐる由今尽く分ちかゝるされとも堀のかまへ

矢倉の跡と木ほしく高く峙へぐる不本丸の

掘今ノ想ひはうる(一)又古井の埋ぐる所と

庭石の五六尺斗りなるう芝間より三ツ見の是を

七ツ石と云余ハ埋て見へと又浪杏の樹の一圍

は余より高さ三丈もる古木あり又堀の外畑道の

間より是より大なるもの一株あり昔菴系の秀郷

尾張国津島祇園天王の社地より携へ来りて

此不より裁しよりこれハ祇園の城とい名付し

とと西の方高さ岸の下の思川とつふ川の流

れて揺く。瀨をなす。小石の白沙のま。り
て川系の打開け。る。凡二丁も。あり。
是け城の要害なりけ。川ハ大谷観音より
出る。澧川壬生より出る。黒川栗野より出る
小倉川なり。落合流来りて。末ハ利根川。入
る。岸の下。は。渡。り。あり。大なり。ちの。渡。り。と。云
栢木。色。より。是。け。宿。へ。往。き。と。る。商旅。を。渡。り。川
縁。り。は。渡。り。ち。ち。小屋。有。向。の。方。を。眺望。を
る。は。西。ハ。尾。列。裂。山。大。平。山。岩。船。小。ハ。日。光。黒。髭。友。山。朝

五辰の。母。間。は。山。く。揺。く。は。峯。を。連。ね。ち。下。は。小
は。湯。田。村。と。本。村。西。は。大。行。寺。村。等。の。村。く。木。立。の
間。は。ま。た。は。見。へ。け。下。の。景。色。誠。は。詞。は。述。ら
る。又。川。の。こ。な。く。南。の。方。は。さ。り。出。て。一。村。の。林。茂
り。る。下。を。外。城。と。い。ふ。詳。は。お。よ。こ。の。案。を。り。は。法。皇。廢。城。考。は。云。小。山。の。城。永
禄。七。年。夏。小。田。系。小。系。氏。政。古。河。は。立。城。を。て。當。城。を。攻。落。り。小。系。陸。奥。も。氏。照。の。城。主。う。を。を。並。て。是。を。攻。落。り。又。祇。園。城。九。代。後。記。を。引。て。云。永。享。十。二。年。結。城。氏。朝。結。城。の。城。は。楯。籠。り。上。杉。入。道。長。持。系。頼。よ。り。の。催。但。は。意。り。て。八。月。九。日。當。城。へ。着。陣。を。と。見。れ。小。山。の。城。を。祇。園。の。城。と。稱。せ。り。を。お。よ。こ。と。云。也。
け。夜。旅。舎。鳴。屋。林。右。系。へ。老。母。ハ。よ。く。昔。の。こ

を知りて居り又古書物をも持傳ふ小山
繁昌の時新井因幡守として十六騎の改役
勤めしる者の末なりといふ語ありるも
左に記して誓古の談は具し

小山ハ後系秀郷の孫なりけ宿の卜町は祇
園天王あり往古ハ秀郷の館の内にてあり
々々別當ハ祇園山感應寺と云同不西の方
持宝寺と云との末にて真云宗也されハ本寺ハ
ち辰十石感應寺ハ十五石也宿の西の方ハ大門

見也又宿の内ハ秀郷山現聲寺といふ寺あり
秀郷の開基にて寺神の天神と熊野權現を

祠或云卜所大掾政光ハ將軍秀々の裔にて曰く小山ハ住を秀ハ
山現聲といふ開基大旦那結城七郎朝廣名称名現聲と云仁治元
庚子年三月十二日卒一推大介入道生西位牌あり

宿より西二里先々榎木ハ大中寺と云あり小山

大膳大夫長村元久元年実朝の時也二月十五日建立し

是を小山家代々の菩提寺と云

小山卜所を正統太田といふ所ハ住を是小山の元
祖なり治安二年十一月十五日卒

秀郷十二代小山四郎檢非使下野守朝政よりむり
頼朝より屬と見正朝より五代目元仁元年正月廿
一日卒と

宿の西思川の縁りよ志鷗谷と云ふ二日市八幡の宮

あり是朝政養一頼朝の子の守神と云朝政檢非使

一〇一は判まといハ
称せしなり

十九代小山下野守高朝ハ天正元年十二月晦日卒

天翁院孝運大居士と称すトの天翁院の事詳也

朝政より二十一代修理亮秀綱より落城と云ふ始末

書付あり左の

小山ノ内下井馬城主高朝公の子息秀総公是ハ壬生殿ノ智

ナリ御代ニ小田原氏直ヨリ七年迄責ラレタリ然氏名城ナルニ

依テ終ニ落城セス然レニ秀総公ハ舍弟結城晴朝公其

節秀総ト不和ニ付小田原ハ相談ニ而裏切ナサレ候ユエ

早速小山落城セリ則秀総公ハ夫ヨリ水戸ノ太田ト申所ニ

落行佐竹義信ヲ頼給フ義信忝モ中久喜ヲ取

立秀総ヲ移シ置キ給フ去氏中久喜ニテ程ナク御遠

行被遊候間天翁院十一代茂菴和尚ハ焼香有

之候其秀総ノ子息一人座候フ亦結城晴朝
ヨリ憎ミ限リナシ去ル依ル出家ノ身トナシ深ク藏ミ
置給シカレ小山家断絶ニ及候ニ付家老トモ相談致
候ハ彼ノ出家ニ被成レ若君ヲ還俗サセ申サント
寄合評定シケル處頓テ其事朝晴へ漏聞小
山家老共ヲ被召寄一々断リテ切腹仕レ其内
岩山ト申者只一人若君ヲ相伴ヒ築波ヲ指テ落
行扱其後ハ烏山那須ヲ指シテ落給ヒ終ニ還俗
成其名秀廣公ト名乗小山家ヲ續キ給フ成

田左衛門助御知耳トナラセ給フ

案るル秀総ト何レハ秀綱ノ誤ナリ中久喜ハ結城ト小
山トの間ニ在リ又案るル関東古戦録ニ小山小四郎朝経ハ小田
系落城ノ後天正十八年大岡より没収セ由ヲ載ス然ル法
書ヲ考ル天正十八年ノ以テ小田系持ノ城ニて八王子ノ番城
なりシ大岡破却セとモ小山ノ亡シハ書付ノ如
くモ古戦録ニ記ス不誤ナリ又朝経ハ秀綱ノ子ナリ也察

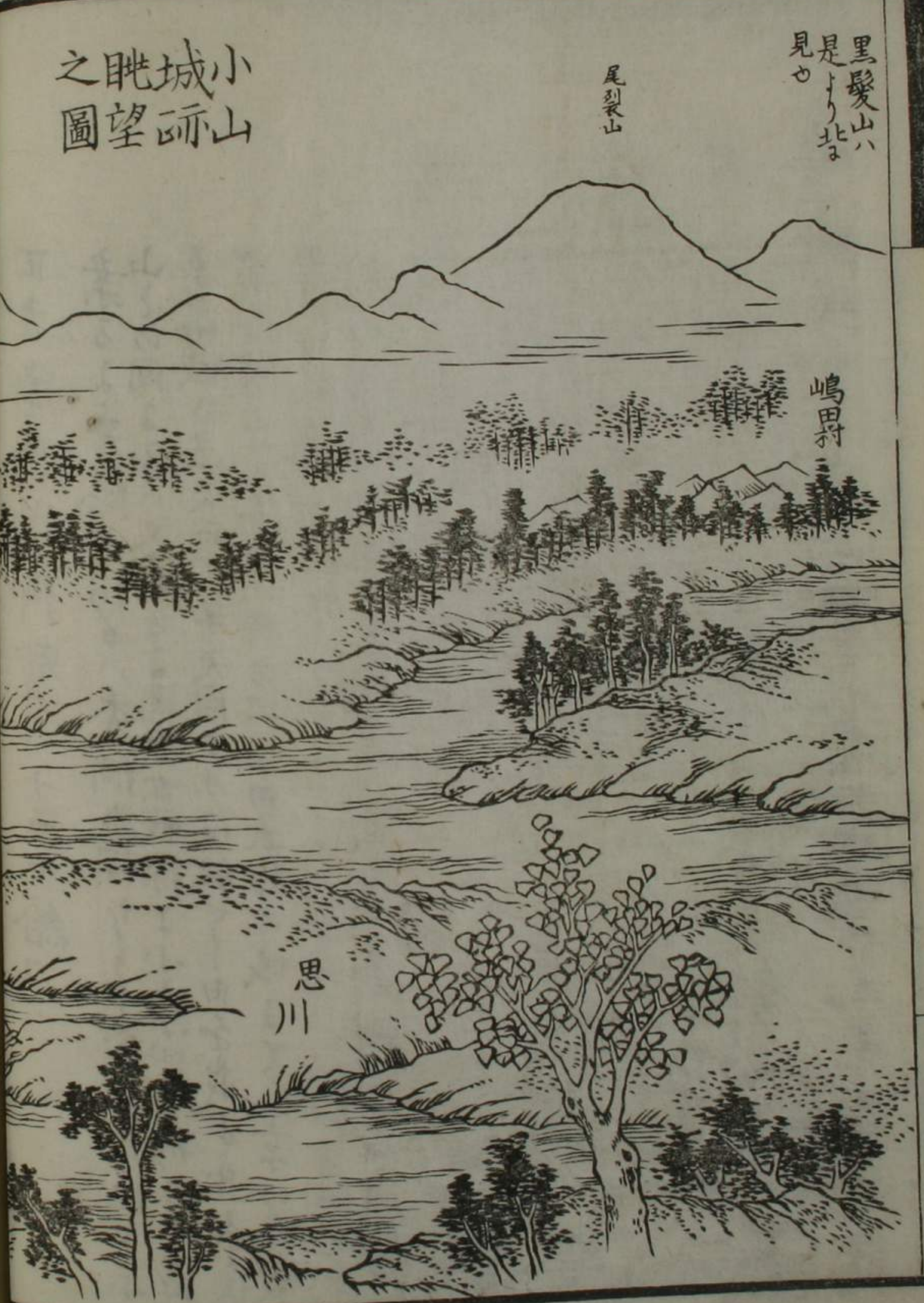
七月七日ニ落城セ取ル宿ニてハ今ニ七夕ノ祝子
一城山ノ入口ニ乱搗ト云ハ何レ一騎立ノ路ニて
落城ノ最ニけテ破マリトなり

宿ニ西二里ニて板本ト云ハ皆川山城ヲ成
勝ル城跡ニ子山城ヲ入道心ヲ天正元年九月十一日



廿四

古里の跡



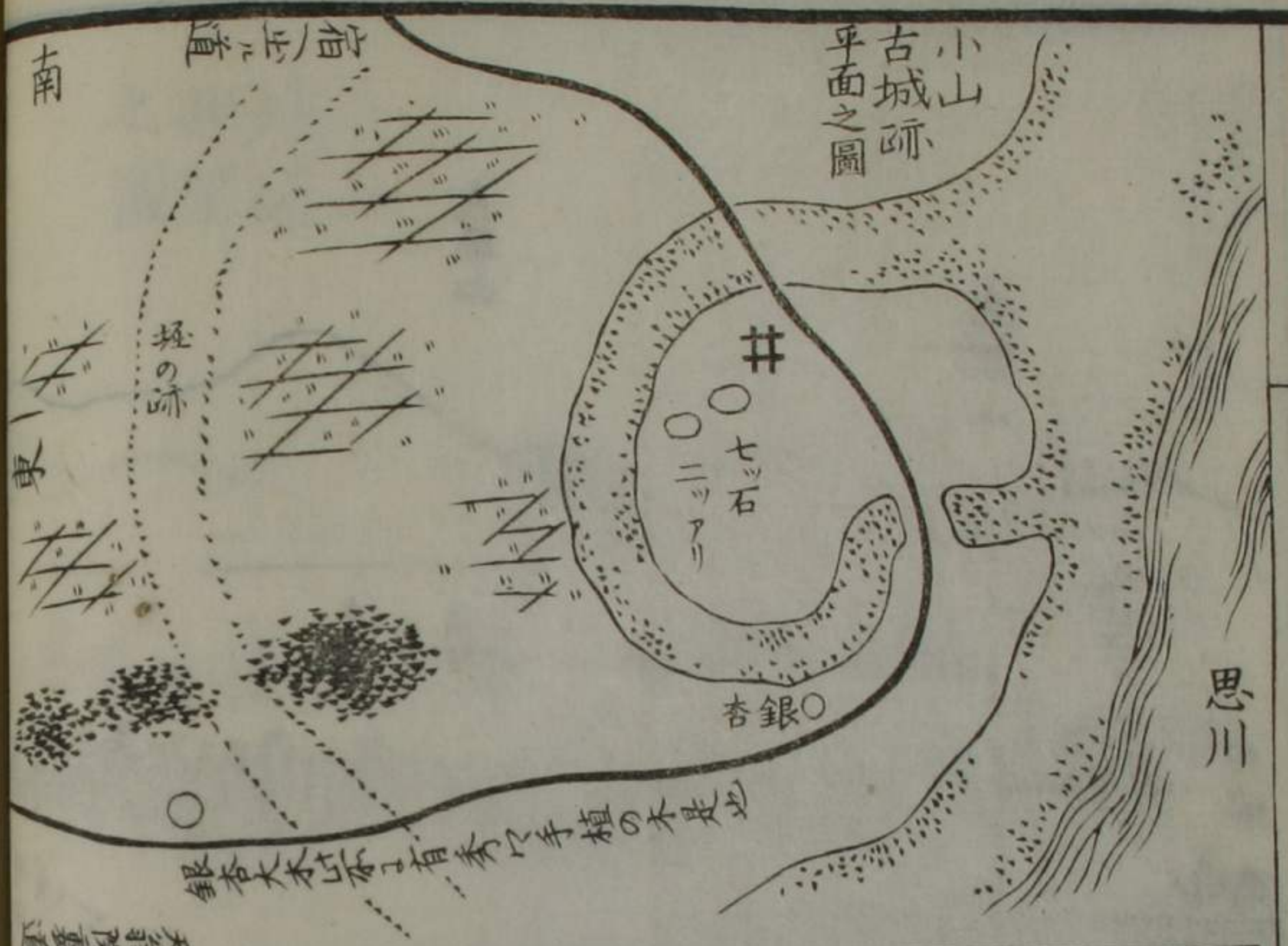
小城市之眺望圖

尾裂山

黒髪山は是より北に見ゆ

嶋田

思川



嶋屋林右衛門の家より傳へる古文状写
 梅より交願ハ受願の誤カシ

交願之事

右任理園情書
 致之者也如妹
 加件

天正十六年丙戌

三月十日高重

新井因幡守

死を傑岑文勝大居士と云小山の一族也其地は皆
 川家の事を記録す一冊ありて村の内は傳ふ
 以上老媪の語るなり 天翁院ハ宿の末西の方より惣門より
 本堂まで三十九間左右に杉並木あり十石の淨
 朱印にて禪宗なり本堂は天翁院を外位牌有

祇園山天翁院位牌之寫

- 孝脫大居士神儀 背ニ小山二十代政長公
- 傑岑孝英大居士 慶長元申二月十五日政種
- 春桃院孝山大居士 慶長十六年 辛 亥三月廿九日秀廣公

天山孝哲大居士

天正九年 辛巳七月七日

秀綱公

大中存孝禪門國公

寛正五_申三月十日

持政公

天翁孝運大居士

天正元_酉十一月晦日

高朝公

廣壽院殿風露貞全大姉 秀勝老母

香雲現卿大居士

天德二年二月十七日

秀郷公

天教主西國公

承安_{□□□□}四月九日

政光公

天翁院ハ高朝の建立なり寺の奥ニ跡景の森

と云ふ所あり昔の堀の跡ありて夫より直ニ城

跡へ続くなり

天翁院の東あり弘法寺といふ寺願十石の台宗の

寺あり東叡山末なり本寺の跡院一寸八分秀々

と云ふ所なり

宿の末を稲葉川といふ西ニ弘法寺あり宿の東ニ

石表ニある田如法道と鑿てあり是ハこれより

四里ありといふあり一向宗にて関東の跡と云

九日

喜沢

立場なり

直ニ終ハ宇都宮の道なり西ハ鹿沼道にて

左右に大木榎木阿里尾より道の左右松の並
木お繞る麻沼の先キ界石とつふ下まで宿并
に村の外ハ長く松並木よて路平に小礫多
く甚往を宜し

畑を隔て泉崎村と云ふ一本澤々たる杉の
木見也土塔どとうの崩塚とて愛宕の社なり尾よ
り十二三町も阿るへし結城道也

半田 半田川思川の上なり

向に大平山の山とて橋阿れとも角なる木二本

つ結び付合六本掛りて駕籠よてい渡るる

叶ハ舟よて渡る役僕ハ歩りよて渡るに水

膝を越さるけ川より小ハ壬生傾也 大平山六持現を
祠る別當連宗

院とて東叡
山の未なり

飯塚

壬生二里半六丁尾より壬生までの間ハ村落なく
左右ハ松並木よて古河川の

下野の國分寺ハ飯塚と壬生との間東の方一里
斗里より阿古瓦を堀出ると今も其云ふよて
余程の大地なり

黒川

渡河に麻沼より流る幅七八間も有り一
歩渡りたり性より十間斗り東に恰も壘乃
形なる塚も上は松数株前建物の如し壘塚と云

壬生

榆木一三里は八丁不足

城主鳥居丹波守

宿の長廿九町性その中央は小川流る城の追
手は宿の西直は馬出に丸く囲ひ土手も余り高
かゝる土人云桓武帝の時壬生中納言と云人
け下は配せし是れ子孫城を築きて居る
と或ハ云中古京都公家の庶子に壬の日は生と

く人あり東方壬生と云下は壬生住ハ繁

昌と云へしと云神の告は依てをくけ下は

本は壬生筑後守と名乗是壬生氏の祖なり

詳は麻沼の
下に出す

安永は慈覚大師の傳は大師ハ下

野國都賀郡の産父は壬生氏也大同三年十五
才なりと有りかくは是ハ下野國都賀郡に壬生
氏有るハ大同の事は壬の事は古記は暗
けしハ詳なりを記し

雄琴明神は宿の東の裏は壬生の忠岑を

祠るといへり

宿より半道斗り西南熱社村と云ふ下野の
一宮室の八島大明神の社あり勝道上人叢
願の取なり後系の実方の款よりうてうといひ
ありとも志し以て魚きまの八嶋に烟をうていと
読めり又義経記書にもええてある名も
古蹟なり古ハ池と云つたりを後人名に叶
いさるとしてハと割りとなり笈埃随筆卷十一
下野國熱社村と云ふの八嶋あり壬生府より一里余

大明神の社地ハ八の嶋あり大なるハ周敷十
歩小なるハ二丈余也鴻といへと水なりけ古事
云傳ふるありてむかへて継子を嫉憎きて
しつとていさよしなるを家の長なるもの密に
隠し偽りて殺して火葬せしといひ鱸を
多くほきて並て焼くれば魚の焦れ臭さ
人を焼くる振なまハ継母ともと思ひて止め
故に魚の名を子の代としひ侍と

下野やまの八嶋に立烟りたるこの一ろよはかり焼

宿の東へ四五町計あり車塚牛塚あり其間五町
計りも一穴ありて双方へ流れぬくると也

下稻葉村村ハ松並木の西境
のトヨヨクて見え上稻葉村是より西の方

十町程入まハ松の木大小二株ありて相擁を

る形をなよとおやこ嬢擁おやこの松と云相傳ふ宇都宮九代

下野守公綱後ノ左少將
治部大輔南帝の北方一て後醍

醐院の倫旨を賜り中院中将定平捕正成る告

文より依て京都に馳上る公綱は被官南条左

衛門令道巴り娘を人質として宇都宮の城へ

入並公綱は後上り京於て戦死し其妻娘

を慕て宇都宮に至らんとして於賀郡上稻

葉村よて疲きて死を娘を穿て城より

走來り母の死骸を見て同絶して是も同

しく死せり村人死骸を埋て印の木松二株を

塚に植け松並詰りも也公綱も延文元年丙申

七月廿日卒を法名理蓮大居士と號せり

羽生田西ノ岡山亀ノ鼻
東ノ小椋山見也

七つ石

西ノ丸ノ山ニ木松ありハ
まさご村の男丸といふ

赤塚

是より東へ一丁斗りよ小墓あり令賣吉次
う墓也と云傳ふ西北の方ハ山く繞りて見ゆ
三ッ峯のありハ粟砦の三峯と云西の方ハ昔
佐竹と皆川との合戦場よて皆川敗れし
所なり又往還の西三十間斗り傍よ木のむき小
五十六七間斗りなるものあり小穴よて石よて
上の左右を圍ふ二尺四方もありへへ漸く爬て
入るり六七尺よして廣くも七尺斗り一丈五六尺
の長よて九尺斗りの幅也四面ハ石の厚きを以て

置甚堅固也旧ハ此穴の深さも何程とつふを
たゞと毎夜此穴より約出て田畑を荒しへる
所村人土を以て埋今の如くせしとかりけ穴り
三ッの説あり昔火の雨降し時け穴よ入て避り
と又一説よ九郎判官の馬を埋る所なりとま
一説よ判官其へ落る時け穴よ匿て敵を避くけ
傍よ判官の母衣掛松あり敵彼の母衣を目
よ逐かけし所け穴よ心つらきよてりるまぬ
今ハ松枯て跡もなし

赤塚
小丘
之圖



け丘の東より小社あり、美經を祠りとも虚空藏
をとも云ふあり、我る車塚も横に穴あり何れも
古の山陵なりんとし、説あり左も有るさよや

磯村

赤塚よりけ村より入るより次茅よりくちなる見を判

官舎と云

吉次塚判官の匿る穴母衣掛松及び判官巻
の名何れをよまは美經より下りし時け不をよせ

られしと云の美經記
等をかんふへし

村夫の語りしハむか

け臺の東林の内より大松一株あり、夜蔓あり、ま
纏ふ総社村八嶋の祢宜け松の上より矢一筋あり

を見て攀宅^マは蛇来て下よ^マ追宅る
祢宜詮方なく友の蔓は取付て垂ま下る
時は角出て彼蔓を食ふと云夢を見^マ
ま^マを繪馬は繪^マさて一宮は掛今^マ
是よ^マ乾の方^マ東山^{トウモ}磯山大明神の社あり社
領七石社家社僧あり土人云昔烏丸殿の灌頂
よて城地繁栄武家長久の為祠る不^マなり烏
丸^マ後ハ宇都宮七代景綱^マ三男とて城地墨
塹の要害ハ今ハ畑と^マなり農夫の不^マ務と

かなま^マ

臺の上よ^マ忍林の間^マ黒川の流^マとひて赤土の
崖峰高くこ^マ之東ハ小控山見え左右ハ景色よ^マ

榆木^ユ 麻沼へ一里八丁

宿の小西の方^マに住む百姓秀藏^マ屋の後^マは榆の
木一株あり目通りよて三圃^マ計り樹るさ二十丈
枝^マ十間余まで直く^マ竹藪の中^マはありある
榆の大木ハ涼山よ^マ何と^マ村落の間^マハ絶て
稀^マなり^マ名^マハな^マ一^マ欵

奈佐原

塩山

はきり麻沼へむり麻を多く裁う麻指
て根を葺きまはらふと云

村より西より西りて小山あり楸山と云又大師の
窪とも云山上は姥石として大さ五六尺斗の石は
四面へ地藏の像を四體つ十六體鑿つてあり
往古け山より大蛇出て土人を悩む弘法大師は
石へ地藏の像を鑿り護摩を林火に祈禱せし
ハ彼蛇を後出るるなり石の上まで平らなり
と旧ハ大蛇は窪と云一を夫より大師の窪と云
又南三四町ありは腰掛石として五六尺斗りなる

斗りなり

石あり弘法大師腰を掛し石也と云傳ふ

け村の左りの方より尾裂山へ新道あり石表を立
つ尾裂はハ大日を安置せしるる一里四月八日より
八月朔日まで糸泊を許す羽黒月山湯殿
三山の写なり

楸山

右の方より光明寺より禪宗の寺あり
寺願三十石也左りは流石道の石いなり

け村は十八萬原として二十町は十五町の原あり
土人草刈場として年貢は永樂十八文を納む
故は十八文系と云一を土人誤りてか唱ふ也

上殿村 村の中は大門宿といふ所あり畑の中は杉の一村ありハ猿が明神なり

往還の左りの方より小堂あり七観音なり西に見る山ハ鹿沼の城山光太寺山其つゞきより遠く見ゆるを板賀といふ

土人云榆木沢より成就院と云真言宗の寺河里門内左り側より栗の木の間二尺斗りよりささ丈四五尺斗りなる枝柳の如く垂きて地を去るより一尺斗りなる河里尾ハ住僧近急の川系よて十年以前拾ひ得て種しと也又同國那須

郡白久村 奥州棚倉への街道なり 問屋安達平右衛門宅より

も同様なる垂枝の栗あり先祖より植来る由今少く三尺廻り斗りの木也 平太弟の八守於云先年う旧臣の末葉也

水戸より河惣望ありと先祖より植来る樹木也とて河惣やせしと也 黄門西山公の此時の由 後河國志云安

部郡牛妻村光明寺と云禅院より柳の如く志こまこまる栗の木あり實も中栗なるより外より目かれぬもの麻書とひと見えたり是と同種なる也

鹿沼 文挾二里

宿（へん）と云るあは大木の榎木二株左右に
あり烏井戸といふ三十年以前迄は古井も榎木
昔は四本も日光山の幸多井也云其内西の方
木の空空の内置置蛇のそめると云傳ふされと誰
見ると云ものなり 明和二年

東照宮百五十回浄法會の尊鷹司殿此所通行の
前より至る彼の榎木の空より火燃出消し一も
焼いぬ急は泥よてそ空を塗塞き火眩りいそ
ほえりよ右空中は焼く蛇骨頭の大さ狗程なる

うありし奇後候を湯と云村の者右の骨を
掌上よのせしは志くくありて掌後を痛む
悩むも稍久くくして愈より去ともまくそ
時益よむれハ少く腫うのかやく迷惑と也
麻沼千軒として壬生より好き宿なり中よ小
川流るるも壬生と同一一休けを押原の庄と
いふけ宿も押原宿と云て昔ハ麻沼宿ハ今の
西麻沼よりあり今のけ宿ハ内町として城の内よりあり
て大寺ハ宿の中程よりとと旅舎のまけ地の

隱士石川博嵩と云者の筆記一冊を出し示す
其中は麻沼の次第あり今其畧を録す

初代

壬生筑後守

稚名彦五郎

本ハ壬生氏公家の庶子也

壬生城主

号常樂寺殿龜雲道鑑大居士

二代目

壬生筑後守

稚名同上

壬生城主

建立常樂寺祭禰廟

三代目

壬生彦五郎

号意安

壬生城主

押原に別城を築く城をの沼より麻沼

と出せるを奇瑞として麻沼を改む男

下総守をして也

按よけは日光山新宮のお

銅炗蓋有り其銘は正應五年壬辰三月一日願主麻沼
権三郎入道教阿と彫て有り意安ハ上総介氏勝之祖父
也大抵永正大永の以の人なる(さう正應ハ伏見天皇の内の
年号にて其前百余年也)麻沼と地を名付し
意安の附は始まるは(さう)を意は権三郎當時地を以て
ものなりん

四代目

壬生下総守綱房

幼名彦五郎

鹿沼城主

父亮み守判發して下総守をして壬
生の城をすくすめ天文三年甲午日光権現

の祠を城の東に寫し造營をいし時下
野國六十六郷を領し自ら日光厩沼
六十六郷の惣改不と称し弟座禅院
日光山の座主を代り還俗して久歸村に位
座禅院と称すし逆心して誅せし座禅院の弟
厩沼徳節裔逆心して兄綱房を天
神叅詣の時を伺て殺害し城を奪ふ

五代目

壬生上総介氏勝

後改美雄

壬生城主

叔父徳節裔を誅戮し徳節裔は
長厩沼右末門守初宮多氣の城主
芳賀善可より上総介と一戦し打
負小倉村に落行板橋將監より為し
討る美雄天正十八年山系氏直に属し
皆川山城守廣照より行浦口を奪り小田
系陥て後歸路途中に卒し七月十八日也
寒光院雄山文英大居士と云上総介成知
南八大宮郡小日光豆尾高原塩系迄乎

は属よ其長下は

後倉勘原 大垣右衛門玄清 後井出 城をさる 黒川丹波

大垣隠岐守 後後刑部少輔

三上大膳亮 壬生上総介内本馬勘吉由といふもの 佐竹との取合のせつたれかりる名

ころろ小田系 記よえの

壬生上総介ウ子も名不詳守部玄孫三

弟も為は落城 素るは天正十八年小田系の 役早て大岡天下一統の世

を攻し守部を 後よ蒲生飛騨守

属とといふ

以上石川記見

宿の後よ杉並木二丁斗りも統こくたの古社

あり今宮大権現と云網房日光を写と

りよ今社願十石也

棟札 = 建立今宮大権現 日光神願惣

政所壬生下総守網房建とあり社の傍

よま云律の一向と云ありい色城の

塚の跡あり小よ玉りて系あり

猷廟浄社と系の墓の所殿の跡なり夫よ城山よむる

本丸と云不二町四方もあり一と云の四方よ

構（城内の岸より大木の杉の朽る切株ニッ
宿よりけ下まで三丁も有り（）甚高か
を又奥の院として夫より二丁程漸く光るよ
る三基有り四方ハ茂林よて眺望な
稻荷の社有り昔の太鼓櫓の跡なり今も
太鼓ハ宿の内田町と云下の西光と云ちよ
納有りて太鼓面（）て田三石付て有りけ城
を亀ヶ城といふなり

城山を西より谷を越えハ雄山寺と云禪宗の

廢寺有り雄山寺と云ハ上総介義雄の法号也

大木の杉の下は苔むる五輪の石塔も是義

雄の墓也そ本は石坂の上は十二面觀世音堂も

是も彼のちの持也

素るは壬生上総介竹浦口をちりて法傳記
よる今地はふり又するは義雄もけ城ニ
住ハ小田原よりの帰途は卒をけ下は葬りて壬生の
城ハ天正の以はありてハ小田原より松俣能也書を龜ヶ城よる

家時代よ可也一となり

宿の西は光岩山光大山嶺々峰花曇山と云内は

嶽くして巖石多くそ形尤奇異なるを岩山と

云至て石多く登るよ道なり卷拍の類石草多し

宿より十町あり城山一見終りて日没せんとて衣を
攀りて歸る惜じ一又杉松の茂りたるは熱帯の
の山王山なり

宿の山は親王塚と云ふあり何親王公をたふしとけ
宿は存の外は好き不也杉木四布と云ふと云富有の者
あり近々十里斗りを限り生子をまびくと云もの
あり二月は抄五百文を十歳ととら十五歳ととら
限りて贈る十三々年以來三百余人を養育せし測
隠餘情と云書を著し一委くさるるを誦せり先

年都卜昌平の世子頭を勤め平沢五助関惠市がとら

交りたるよし一季以五十斗り人物を淳朴なり或州四布を
流陽ある

失火ありあり家内樹と身を以て免す財おの灰煙とかりとんと思ひ
火流りて後よりとら彼の救活を得たるをの若者や早速走り集
り家財潤富の敷不残持退て一として焼失とらおや一実は陰徳の賜報
とらと炳焉とかり

又井柳屋長と云宿の世話役四十斗りの男たる
大般若經六百卷を一筆と手写し一十年を経て
成就し西形の十相寺と云寺願
三十石菩提寺へ納め
とらと也是等ハ大般若の地とも稱す奇特
の人物と云とあり予々門人鳴田元礼も宿よ

任をたれり許して四布を流すハ一賄せり四布
宇都宮の流をよす草刀 許され月俵を賜ふ 産物ハ麻をて宜し葯蕪も
よ一烟草糸も一種の風韻あり又八寸と云
紙も有りさ透して質古代の側理の如し
又石多し一石の門のま窟中にもその名忘るる
窟の西三町約て麓山と云山ハ兩頭の蛇二尺出
る可長さ三四尺も有り一今ハ骨を小蛇口忠
云流るといふ商人の家ハ不持と蛇の出るハ
三四年もあつたり

宿を去る事東一里計ありて清く小川あり甲
川と云又行く一里ハ曹門ありけ二筋の川南ハ
流す三里計ありて兩の流を相合て一の川
と成て又南ハ流る是を安川といふ則ち壬
生の寺田門の上かり源義家朝臣奥州征伐
の時甲冑をけ川ハ流しと土人云傳ふ
宿よりハ一里計見野村有明和四年亥三月上
旬畑ノ古塚ありしをこぼちし一の瓶を堀
出ると内ハ唐令の塔の内ハ聖觀音の像

一體古鏡一面朽損ししる経多くるに又
古鏡九百九十文有り經ハ當塗王經のよ
當塗王ハ觀音のり也と申人有り鏡の銘云

興國四年壬午三月吉日

寶祚興久兼藤從三位資道卿公當塗王經□一字三
禮一品一錢千部藤從一位宣房卿公福壽

不二行者授翁敬白

と有りし後醍醐帝の在宇万里小路後房遁世
のち八大本紀詳也系於妙心寺の二祖となさる授

翁宗彌禪師と云々とと興國四年より明和四
年まで四百八十余年を経て世に現き同村城宝
寺にて開帳有りしけり後系於妙心寺に
之を佛像并残經古鏡古鉢とも若干の令子
を彼のちよ縮めて妙心寺の什物とハなま土人の覺書
を之一に茲に記す予十四五才の以て総龜と云ふ本にて是又
土中より瓶を掘出しし内は洞塔の内は觀音像一作經文古鏡古
鉢有り塔ハ高サ七八寸も一經ハ二なく三なりとてつ
社に沙利護の内は納め置り古鏡ハ全くして銘は整衣冠
謹瞻視と陽字は鑄付し是後房の物なりとりて先考の
許は於來り示を者有り一外は後房と云る性成証拠も
鏡の銘の之を是居しなり大抵下世にて掘出しても固

此はもとありて一誠は歴年土中ニ埋まりける其地の人るに
るる神仏の加護ももつる一思儀なり一事なり
宿の末小の方ニ社あり天神の古社也徳第斎
り網房を弑する不なりと云傳ふ

十日

宿の先田間行て押原村ニ出るに西二丁半杉の
森の街道より見ゆるハ喜連川後の城跡にて
本丸の跡も怪しあり其先三四丁奥ニ坂田と云
山のうへには不塚あり古河の義氏に不なる
住せしりも有り一や是をいふも知る人なり

又一説ニ押原庄の内玉田村は不の森あり本宮
新宮を祠る小社あり是を不跡といへとも田
畑にて跡もなり正元と云禅宗の寺ありこれ
を城跡なりと云又 清成搦の寺あり如来堂より
四五十丁入て不の森有大杉十四五本もるといふ
土人より多く処匿くして造なりと云一丁末ニ宮
嶋の辨天あり勝道上人日光へ至る内水ニ浴
せし不かりとて今ハ野地となる沼ハ二十間四方も

阿る(一)麻の走り出るとよ沼尾也水ハ二つ
うなまとも麻沼中の上水となり宿の中をも
流ま田よも引となり

鹿沼川

黒川共
云々

清成橋として十四五間も阿る土橋阿る

日光の真巨峯系より出る奈女川阿る日光奈女
川今市奈女川と名うるとして小来川へ落てけり
流るとよ又豆尾より佐野へ続く横根山より
出て小来川となり夫より麻沼川となるたひり
橋の水の方迄山見え東ハ切岸よく景色好し

とよ予う道行時ハ夜未明雨勢涼しく一向に見
え分よと又東よ二丁汁里よ城山阿る水の岸
よ侍よ是多氣派三郎宇都宮
り事也麻沼を攻り
時岩を構り跡なり慈現太郎大明神の社

升形 汁壺

け下よ不絶清泉
出る不有友名つく

八幡臺

社ハ左リの方よ阿る麻
沼より尾迄一里なり

臺を降まハ小掣山見ゆ左よ八富岡村の拓石山
こゆ山上よ拓石権現阿る夫よ連なる山を襲
山と云右のよ小掣山よ続く山を岩崎山とよ

山上は鶴子観音あり近郷より馬を牽て来
詣せむ馬の病の氣をぬくるよてもある一
小掙はハ岩窟の内は太日と滝の尾権現あり
け山をかくすれとも千任宿の末よるハ二の
なりそ間を隔る山なりさう故也けハ山蛭やまひる
て多くせりかくしを以獵師鬼を追て初て
山上はせり見出さるるなり

富岡村 武子村 小倉村 界石

古河よるは続きて是近ハ大抵松の並木街道

左右はあり是より法神領にて左右杉の並
木なり右のうへ小なるは五尺計り幅ハ
一尺四五寸もある石表あり

下野國都賀郡小倉村同國河内郡大沢村同國同
郡大桑村自此三所至日光二十餘里間植杉於路
傍左右并山中十餘里以奉寄進

東照宮

慶安元年戊子四月十七日

從五位下松平右衛門大夫源正綱

かく譲て何里郷は松平陣忠吐まじりハハ文
左までの事もなけまじも羅山を先祖の形
て認め貫ひしりしと也行るこさて土人守
はけ石表の裡は條系若き清園城市左近つと云
名彫て何里是ハ古の橋本院の家老の子孫也と云
岩崎

右は小倉山何里外峯連なりて末はつゆる
山を城山と云橋本院の城跡とも云又壬生う
被官小倉左門う城跡とも云皆りく石山也

橋本院は城跡何事如何の記なるやと尋ぬるよしむし初めの以
ハ日光山は八宗の坊あり総て三百坊にて座首を座禅院と云
八宗互に宗論起り戦闘し及山其時僧徒夫々近々要害を
據へ楯籠まり茲は云橋本院の城を構へハハ其の事なる
一奥州街道の大桑にも本本院の陣跡あり外にもは類も
と也ケ橋は争乱打続し故漸く衰微して天正の頃よりて
ハ僅は七坊のこまなりと也
清鎮座以前古へよて傳りし座禅院の記録ハ一山学政の外
見る事なりハハなると秘本なりと也

文狭ふんさ

板橋へ一里 およ記し城山は宿の直は後なり

け色は山の峯の樹を透して疎りし間
綱を張り岩燕いはつたと云を捕ふハ九月の間計り
けをむる日光山華嚴の滝はハ年中ると云
小野原山
云いはつた

漢名鶴鶴 街道右の傍はさくくして至て形のよ
なり
さ松のまぶくは生さる山あり是も城山と云
壬生う被官板橋將監う城跡なりと堀巻の
垣子今も存せと成り

板橋

今市へ二里

西の方法の山く連綿と見ゆ

土沢 長畑村

鶏の嶽々左りの方より街乃

の傍平系よて早さ下を菅の沢窪と云け
下の坂を長坂と云又そ先さ坂も十石坂と云
け色左右杉並木の間に眺望する景色好し

室瀨

左より杉山あり鎮守の山小川ありて橋

掛る名詳石川なり兜川は流る又左りより杉の

一むく茂りするを子木と云下は小社あり
十丁程先より又小川も土橋掛る志ど橋と云神石
の裡より流来るを云け街道より今市の入口迄分
出る

今市

神石へ二里

西の方宿の入口より石地藏の大像あり百三十年
程前日光山のごん神まん給の大地蔵を押し流してけ下

に至る今よそ供よして至り宿の小並木の
西よ古キ社有り鎮守高尾大明神也

宿よ東八町斗り茶臼玉と云小山有り眺望も
宜し春の頃ハ宿の者なく遊山よむる山のふもと龍岩

ハ宿の中程より東大桑街道桑の道より右の方二里

斗りよ鬼奴川の流左右切岸まで端五十間も

一し左右よ川系二丁斗も一し岩ハ南の方今

へより玉の川縁りと水の方と桑山の双方よ三十間斗

大石有りて中を水流る石は種々の形の穴有りて水

の方なり石尤奇絶なり其景色詞に述

去なかり後往來の時甚なりこれハ川向よむる

る叶ハよ強てむんよハ半里程上大桑街道の高

徳の渡しを越てむる一

け宿よ東十里赤奈き山のほよ温泉有り峠を

三つ程踰川もこえて深山の内を引小百村九郎玄湯

村どろぶ村なりを引湯西川よむる則温泉場よ

て一村をなす地の百姓ハ甲斐の武田家来勝頼

滅亡の時不逃をあり一者の子孫よて系

備武器なく不持する者多しと也 或ハ平家落人の
未なりと云

栗山とも云栗山蕎麥ハ地の産也岩茸なり

多く産と云ハ山中の民淳朴よて何アし今

ハ材木なり出し江戸へも往來する所昔とハ異

なり志し今ハ婦女ハ髪髪は油を付と櫛は卷

付置牙也也山の奥ハ會津領也近頃出る栗山

手桶も會津より大の不一あると云なり

瀬川 野口 天臺 共云 西南ハ尾裂山見ゆ

七里新田 東の方ハ土手を築て柵の田ありて
門の付る人參の如なり

右ハ生岡大日道と云石表あり大日ハ街道より二

町入るまで古く大日なり弘法大師の灌頂と云ハ

祢宜持なり

町の向西の道傍ハなる二丈余もあり丸き岩突

出しトハ洞泉出と岩舌と云其形奇なり近

頃之上ハ石燈籠をよつ

けをより町のほ左右とも皆山と打続さる低

く霜葉黄紅打雜見ゆるなり

穢多町 松系町 日光の
入口也 石屋町 御幸町

鉢石

八時前より浄本坊へ着せしる予も七時前より蓮
藏坊の寓舎よりむる随従之者門人江戸浅田
元哲同生田永仙越中富山浅井玄圭用人尾
山作馬中扈従山岸泰捕荒木市次僕五人
是より日光山よて
京叡王麻疹よか、そのひ滞留しるる二十
日浄本坊の外他所よりむる予阿まはぢ志
くれとも山中の人財く来訪しるること多

く奇事異所か、とせと別よ記して
蓮藏雜誌二巻を綴り故よけ書よハ
山中のりハ省よて唯驛程往還の間
見よる事のよを記よ

右蓮藏雜誌ハ藁本のまよて阿ま、
其歳の十一月廿八日よ火災よ焼失よ里山中
の秘を洩し、りも阿まハ彼の天狗などの悪
きてかくせよよもや

十月二日

朝五時日光

涉發輿なり

七里の取付は板橋ありけ川ハ流石のほの観音
岩の下より出る志戸湊川なり

今市

大沢へ三里
十二丁 戸八百五十

西の方に見ゆる山を長畑山といふ東は見えぬハ
系山なりけ山ハ宇都宮まで大山なり上は釋迦
を安並と温泉数ヶ所あり推茸名産なり黄連
杯も此とけ先キは塩系といふ下あり源三位

の岩屋とて地上は岩窟あり内は鐘乳多
く頼政の匿まかり穴といふふか
塩原の町あり漆器を造る山中の町
よて今津への間道なり友は慶長五年の
乱にも景勝高原塩原の土民は一揆を起さ
ざりし傳記を見ゆ

森友

東の方には先さると云
浄土宗のまあり

三梨 大沢へよりて東の方並木のおは垣も

その内は又垣あり垣の内は林あり是ハ

猷廟

淨社叅る時の此殿跡なり林の内は異
木阿里さるサ四五丈圍二抱へもろへ一葉ハ杉の
如くよて堅く花実たは梢は生々実ハ松よ
似て大なり 小野蘭山云ツガの木とよふものなり 堀
の傍は茅屋何りして 尋常のツカとハ大は相違せり 水碓くろまを掛け

大沢

上徳次郎へ二里半四丁四丁戸七十
宿の南は橋あり田川とよ

淨殿番の者の住居なり
是より徳次郎と東西は山あり峯の形極く
よて目を眩くしむ今上下の東西をふらして

左に記す土民の詞弁一うぬまハ閑誤る一

東

西

鳴神山

板賀山

木和田山

山口村

虎見山

村の存する
形至て宜し

猪の倉山

小出山

鞍掛山

峯平長し

上小出村

下小出村

石灘村

け村度く取付は一新
茶をとり豆場なり

小池山

石灘山 峯長く徳次郎へつく

篠井山

妹織山 峯尖り他の山より高く聳ゆ

石灘の大橋

余り大きき橋は有り

け不よりかーさるさ不は完る妹織の小まきさる
系山そ外又羽は名さるさ徳山見え玉て景色
よろし戊申の夏

浚廟 浄社 叅くは時殊の外は法賞美有く狩

野栄川は 仰阿里て圖取らせぬふとなり

山の麓の村は白布四反を帆の如く綴り接は
竹竿二本は付て屋の前は建掛をさるを
二ヶ不見より土人は尋るるは是ハ新に亡者の
家也三日の間ハ日光を穢さんりを恐まてかく
はゆる也村中は格式ありて軽き民家よてハ縁
立扱の物を用ひ名ハ幕と云くをけを皆は是風
俗なり

高館山

昔は山は鬼住り冥白名池向て退治されし程か辛去かりて不
を冥白村と云又旗を返し不を旗より村と云皆け山の東より岡

白何れの岡白かりは是を尋ぬるは知るものなり或ハ云宇都宮公綱也
鬼の住り所堀の跡城の跡ありとかり

上徳次郎 中徳次郎へ十四丁 宇都宮へ三里
三丁 戸五十

大岩山

傳法寺山

大綱村

高松山

おしん 矛抱山 岩有り 矛を抱
る形は似たり

毘沙門山 蘇の森の内
毘沙門堂あり

新里 羽黒山

徳次郎明神 大門並木にて一丁も有り 石の
鳥居立九月十九日祭祀あり

丁奈立山 林の陰にて見えたり

中徳次郎 下徳次郎へ四丁
二町 戸四十

西より多氣の不動山見ゆ

下徳次郎 宇都宮へ二里半
四丁 戸五十

玄蕃山 低く長き山あり

野沢 立場あり 宇都宮へ二里半 石搦も谷川と云

見より裏三十間計りよ百姓長左衛門と云もの
もそれゝ家のあは静接とて静はあ接の枝を
杖よつとある源家の運の用んよハ八重一重の
花咲かんとしてかの杖を地よ挿ゝり不思儀やほど
なく根付さて今ハ田一丈計りの大木となりハ
そ一重の花まゝとて深く咲かり枯るれハ拵を
生して絶るゝりかり

長岡山 街道より一里くぐると入る長く低き山より
て一里半も隔るへ一里の穴ありて一休づ観音
を鑿てありけ岩窟に生くる蝙蝠は耳の長
きあり鬼かうりくくふ又花のくくく
かる物出くくあり牡丹蝙蝠とくくくまふ也
目撃せり

寺の内 宇都宮へ二十四丁

西のくくく某師堂あり

宇都宮より日光へ追分のまある門は湖南派
と云額の掛くるさあり平蓮寺とて禅宗也

宇都宮

雀宮 宇都宮 河内郡也 宇都宮 千余

城至戸田能登守

城は宿の南の方あり大手や街道より見之と
日光の追分よりふは行事二丁けりして路二筋
よなる東は安及の本道あり直はゆは宇都宮明
神のおは出と宿の長サ越て一里也入口は南新町勢
木町歌橋町大王町蓬萊町茂破町挽路町材木町
新石町傳馬町左りは曲り本郷町新町是
日光道あり
宇都宮明神は六社あり社領千五百石あり大

鳥居の内石坂ニツリ上り拜殿奥に本社
あり其階の勾欄に擬宝珠の令のめつさなり

神君清寄進にて清諱の文字彫てあり外石壇

なくともそ頃の大名の名とも彫てあり越て甚

宏麗にして東西と北の方より廻廊ありて南向

なり藤原秀郷の納り大刀杯種々の神宝あり

る先年の回禄に失くす惜むべきなり延喜式神

名帳曰二荒山神社各神大祭大己貴命社傳曰神護景雲元年和州清諸
山より鎮座承和五年二荒山の神を河内郡宇都宮上より移り奉る
東鑑曰文治五年十月十九日樋凡太郎俊平一族を當社の職掌
とせり

土人宇都宮先祖のり并宇都宮社領のりを
記ししる書付をよせしるものあり左に記す

藤氏宇都宮元祖比叡山の座主宗圓

なり抑此宗圓とやとハ大職冠鎌足十

二代の後胤栗田口関白道兼より四代兼房

の子兼仲より弟也後冷泉院天喜五年丁酉

春伊豫守源頼義朝臣其子美家朝臣

勅を蒙り奥より安倍貞任宗任を追

討しし時宗圓勅に依て下野國

多氣山不動の室前は於て怨歌退
散の法修し速に奇瑞ありし
依り勸請して下野国司に補せ
らる則ち縁を解て宇都宮の城主
とハなりぬけ年度主二十歳也と
天永^辛午十月八日卒を年六十九歳也
二代目八田備後守度主三郎從五位上
原宗綱ハ宗圓の兄兼仲の男宗圓子な
るハ養ひて嗣として下野国社務職と

系より左馬頭美朝養ひて常陸
国小田郷に遺跡あり故に小田源氏と云
後宗圓の跡を継ぎと母ハ紀権頭正
隆の娘也應保^壬午八月廿日卒女子二人一人小
田別當有重の室稻毛三郎重成の母なり
一人ハ小山の野大掾政光の室結城七郎上
総介朝光の母也後頼朝より下野国寒
川郡を賜ふ寒川の尼と云ふハ是なり
東鑑一佐殿の乳母寒川の尼と云ふハ故八田武者
宗綱の娘にして小山下野の大掾政光の女房なり

古老傳ふ宇都宮社領ハる六万石あり
をいつとなく派三郎以内の如くよなり神
領社領の分ちなうりし処はふ慮よ慶
長二丁酉十月十三日國綱没落の時社領も
とも没收せしむる六季の間を以ての社と成
りぬ時よ飯田祝部ハカリと云老功の社士度
愁訴よ及ふ知彼是遲滞して慶長七
壬寅年よむす松平の法称号を以て
賜り十一月廿五日千五百石の神田を寄

附しきりし目録よ千五百石築一瀬と
あり鬼怒川の鮎築三町目の内を神
大跡國宗早獻守於まと作る毎年築寺時ハ専を大夫の祝部之
此幣一本捧川上よ立て川流よ投入し
此幣の流入する築を当社へ献納し慶長
八年己未今よむるを一季も取らな
天正十八年大岡具良へ發向の長國綱も大岡
へ降系せしよ國綱の女日本無双の美人なりと
きく不覚ある國綱返答よ及む夫より大岡何

となく氣色何〜翌年と云り浅野長政大河
内善兵衛と命して檢地せしめ遂に城を没收
そとなす 案そのは字取ま必徳ハ柔弱不器量者にて
氣を失ひ由法書と云は説と異なり又多
氣山ハ字取まの居城なり

二代將軍の時時江戸に火災あり跡三序城中にて又
付早打にて江戸より出て登城と

大相國家早速清目見被仰付跡三郎長途の事
如何してかく速來り〜と尋あり〜我ホウ城ハ

山城にて江戸の所より目下見おろ〜といと此答申上げ

るは目下の詞と大ふ敬也と怒り〜せりい

至程討手を差向らむ討亡され〜となり

接するは佐野信宣唐沢の城没落〜鳥居の前
事見は同一法書と見も是ハ遷傳の談也

半町程東に日光堂あり小坂を穿る堂

の後六七尺許りの岩厓あり石蛤を出

る其上に鐘堂有けを標茅系と云艾を

生を是を抜根切ると也 古歌にいハゆる

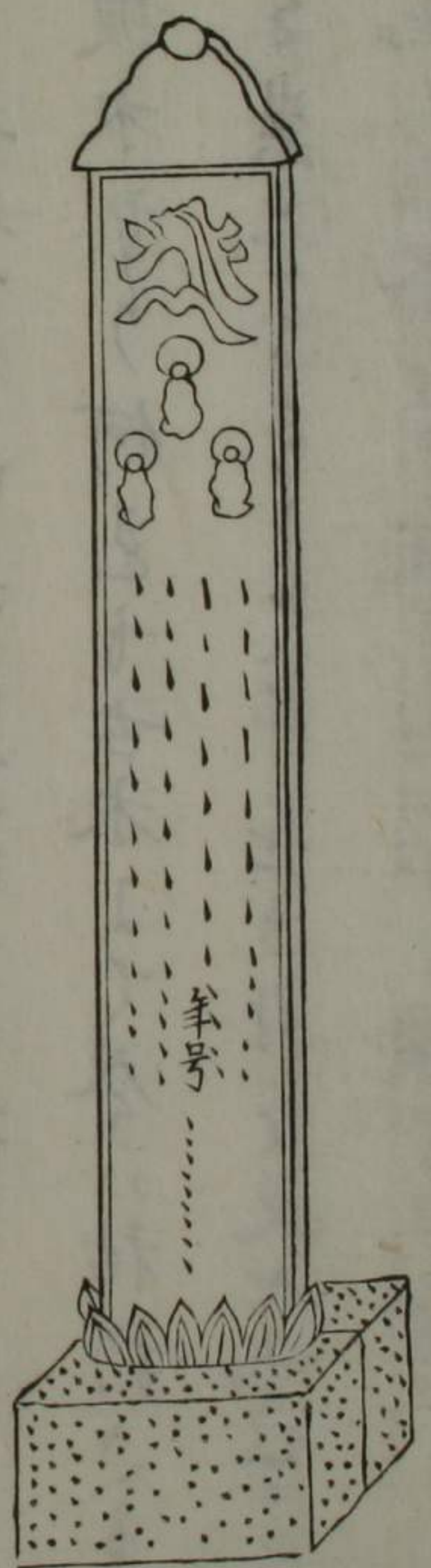
志めトウ系の〜もくさけ不を云と疑ハ

僅の地を系とりよもいあり

此城ハ本多上野介正純ノ城となりしは
故にきて本城ハ破却して礎のみ残り半
月の形の地あり元和日記ハ正純乱気にて根来
百ヶ所へ遣ハし誅戮其宿の内なるさし
首を宇都宮ノ首塚を築
町延壽院あり地蔵の像ハ多
気山の不動の像と同木にて榊木
にて作りしものなり宗圓の叡山よ
り携へ来りしと云ふ

芳賀郡の内真岡の大羽と云ふは宝藏寺と
云ふ真言宗の寺あり
け不し七本あり明神の東西或ハ城外あり
皆榎木なり何れも古木にて今ハ枯朽する
もも祟をなるとして手をも付と又七水あり
皆池にて水玉て宜し七ヶ不し散てあり
明神より十三町東ハ誓願寺と云ふあり浄
土宗にて芳賀伊賀守兄弟の開基なり門を
入り一町程本堂のお左の方ハ鉄碑あり

丈五寸横幅一尺余厚二寸正和元年壬子八月日孝子
 敬白と誌せり宇都宮八代正五位上三河守公綱其
 母の十三回忌は追福の為に立たるもの也と云傳ふ



梵字の个は三尊弥陀の像あり其下は七字
 四行は八葉白蓮一肘間炳現阿字素光色禅

智俱入金野縛召入如来寂靜智其下は夫母
 者四恩の先也孝者百行之源也と云く以下
 四行八十余字ありと字漫漶して存し難きも
 のありは鉄碑に近以けさの後の溝の中より掘出されけ左右より
 くるもの也と門人苗藩の長手塚元庵話せりけ左右は
 高さ五尺許り五輪の石塔あり新さるものなり
 上は阿字を鑑り小の方ハ芳賀伊賀守高昭
 南の方ハ芳賀伊賀守高直の墓印なりといふ
 芳賀氏ハ紀清両黨の一にて宇都宮に属すけ
 兩人ハ太平記に由る兵庫入道禅可并伊賀守

真う父祖までも阿る（さう今も孟岡は芳賀入
道禪可う城跡山阿は妖怪出るとして入ものなりと
なり旅舎の主は地の名所旧跡の事を尋るは常
う江戸は汗を流して一向は所のみは知らぬと答へ
唯語をさるは此訳まで八人夫の賃銭古来より百
疋五百人の所定なり右取直不勿論近々の困窮
いん方なりとして愁訴をさるうこそは是の
事ハ予うおのすても如何ともはかたさる
なり

宿の東の方の出口より五丁程をあるは城へ入
る路は小橋板橋阿は秋の橋と云ふ由來
をあるものなり

宿を出ては南は筑波見え東よりて加
波山見の東の方森の内は堂も根木の不動と云

三日

梁瀬 東川田 松原の西は小椋山
見の是より一里なり 上横田村

臺新田 五場なり雀の
宮へ二十九町

雀の宮 石橋へ二里半 宗都宮へ二里二丁
五丁 三丁余 戸七十一丁余戸七十

宿の山の口東の方より杉の森あり實方朝臣を
祠る是則雀の宮也或云源武衛東征の時此
処より納涼しるを以て涼の宮とも号す又
云神雀ありて人の死を救しありを神
祭りしと何と云ふ未詳

鞘堂新田 裳原新田

河内郡なり小山左馬介美政と宇都宮

基綱と合戦ありて基綱打ちまゝなるなり

領分界の争論より起る或小山
官方より逆心をとり非致

康暦二年 庚申五月十六日

のより是より起りて蘆倉の氏満十二ヶ国の軍
を率いて美政を征し美政息若犬丸数
度蜂起のり蘆倉大草紙ぶ見えたり

裳原と鞘堂新田の間西の間街道の脇に
地藏院といふ寺あり是ハ小山宇都宮合戦の
刻戦死のもの鞘を埋めし上は堂を立地藏
を安置せしる鞘堂地藏と云ふ安房の願をかく
是ハ蘆倉ありと云はる久世大和守領分也

此所の西より小林村と云ふあり朝比奈と云ふ小

名の下は美秀の墓としてあり美秀和田合戦の時後下野へ跡を隠し、よや古き書記は考ふる可なり

新田 小山新田 下石橋村

石橋

小令井へ一里 雀の宮へ一里三町
三丁余 戸百二十

宿の心の方まおの東は一叢の森もあつた宿の社なり

宿の小より入口の東の方より雲と云ふもともち五石也

台廟清社糸の法時は下は 渡清なりて其清殿地二十石除さ也夫より二十五石の寺願となる

寺門は田四尺許なる二丈より八間程張出たる山

茶樹あり紅花なり安永戊申の四月

浚廟清社糸の法時は木の下の法懃ありて日本一の椿と 上意ありと也

宿より八丁程東大切村は威徳天神の社あり一國一社にて下野の一社なり法朱印三石あり別當威徳院宝藏寺といふ祭ハ正月九月の廿五日也大門前より馬札ありけ処ハ菅公の骨を瘞めしなり

色より字がまう被官大切寺石見さう城址
あり四千石を見性寺とよみ菩提寺あり今
其裔孫ハ大切寺孫左邊門とて松平き波
さよ仕へ伊豫國今治よ任と

是より西十七八丁よ上代料村とよみ不の畑
の内杉の森の内よ小社ありも南ようつ木
の一村生したる不あり孝謙天皇の陵と
よみ新を掛るよ米糠をとりさてうつ木の
不へ呈くと云西光寺とよみ真言宗の寺の

持也内朱印三石也按とらるよ續日本記より

宝龜元年八月丙午高野天皇孝謙帝の事也を大

和國添下郡佐貴郷高野山陵よ葬とあり
よけ不よ寢陵のありるよ疑り又中代
料とよみ不あり是ハ西の方十町斗りよあり
大光寺と云大刹の跡也とて藪の外よ堀
なと残とあり

去戌年九月十二日石橋宿の西上根川
と云不の村夫月夜モ夕シと云たひ菌を

喰—四人其毒は中り兩人ハ即日
死—兩人ハ十四日通行せし時腹張
り煩悶して死はらうと橋夫の云
を聞—衣懐中の紫金錠をとり
今日け不を徑るは依て猶又橋夫
尋ぬるは三人死して一人活し了と云
味て菌又月夜茸ともいひ白キ菌にて
渦卷の紋あり裏面は洞なり大なる
林もの也と云附記して菌譜を編は志の

る人よ告く

石橋左右の系を
小金系と云

筈原新田 立場より

小金井

芋ヶ新田へ廿九丁石橋へ二里
六丁四二間 戸百五十

宿の内は慈眼寺と云裏二町程あり小池
は水の涌て出る所あり流を絶る事なく四五
丁の田はかゝる享保の
浄社叅の節ハ 浄上り水は成しと云れ小
金井也按るは八十一難の揚云操り注は井は
者謂谷井爾非謂掘作之井山谷之中泉

井初^テ出^ル之^レ處^ニ名^レ之^ヲ曰^ク井^ト見^エ之^ル小^金
井の井も此心なる^ニや

右慈眼寺ハ宿の中程西の方^ニ樓門^{アリ}
多宝院慈眼寺^トて真言宗^トて法朱印
十五石千手觀音^ヲ安置^ス

宿の東二十九町^ニ某師寺村^ト云^フ処^ニあり
往古勝道上人得道^ス戒壇^モあり^ト
某師寺^トて寺ハ天正の頃小田原の北条氏
直^リ為^リ燒^レて一宇^モ残^ラズ今其村^ニ

ニヶ寺あり一ハ医王山菩提院安国寺^ト云^フ
某師寺^ト云^フ祖蓮和尚^ト云^フ其頃鑑真和
尚^ト負^テ來^リ今^ニあり又天平宝字の棟札
あり戒壇の瓦^トて今も某師寺瓦^ト陽字
に附^クる瓦^ヲ掘^リ出^ス又戒壇の跡
に六角堂あり其内^ニ岡浮檀金の釋迦の
像^{アリ}天^ノ降^ルを勝道上人の拾^ヒ得^ル
る物^トて安置^ス同村三丁程離^レて祥雲山戒
壇院龍興寺^ト云^フ真言宗の寺あり鑑真大和

尚天平宝字五年五月昔と鑿る幅一尺は高二尺
斗り石笠の何る石塔何り又弓削道鏡の塚とて
十四五間も高く築くる上は一丈四五尺も廻り何る
ならの木のとも塚何り石表も何とも文字見
かへけ寺の因山は慈蒙上人と云建治二年
示寂と位牌は記して何り享保の以古の某
師寺は我寺なりと互は争論は及び遂に
寺社の奉行へ訟へ出さる程を経て
両寺の僧を呼出さる地古の某師寺は
処は相違なり去なかり其場下は両寺共は
証拠何りて何とも定め難し終は
争は無益なり戒壇院の號は公用たるへ
中流して事済しと也起は龍興寺にて
説法の附け寺古の某師寺は相違なりと
ふを安国寺にて同付さるよりの事なり
け下は佐竹領五千石の内にて安国寺へ十石
龍興寺へ二十石寺領を付さる也某師
寺次郎左衛門の城跡もけ色はあり古く和

田村と云ー田なり

按とるは本朝戒壇建立ハ孝謙天皇
淳和天平勝宝六年白塔寺鑑真和
尚入朝ー盛ハ戒法を説ーハ聖武
天皇貴重ーハ東大寺ハ戒壇を
建立ーハ又後淡路廢帝天平宝字
六年ハ筑紫觀音寺下野某師寺ハ戒壇を
建立又其後嵯峨天皇のハ宇弼仁十四年慈
覺大師先師の素意ハ任せて延曆寺ハ

戒壇を立委く塩囊鈔ハ見えとるハ○続日本
記ハ天平宝字七年五月戊申大和上鑑真物
化と見えとる又宝龜元年八月庚戌道鏡
法師を以て下野國某師寺の別當ハ任ー
發遣とるかくのまハ道鏡ハ此不ハ終りー
かかん鑑真ハ戒壇を創建セー僧灰墳墓
をけ不ハ設ーハ詳なるを志しとる
是よ里西の方一里半許り壬生の多おの版塚
ハよりとる不ハ某と云村あり国分寺近き之思

川と姿川との間川中とては案より十七八丁も有り
処は国分寺原あり其原は琵琶塚とて古き木
植ふる塚いくくと云数を考ふる又石室多く
その内三つ程ハ室の内疊八疊も敷へる程なりけ塚
のうらゝ紫式部の塚ありと云ふも聴かざり
そ此処国分寺より十七八丁も有り又其邊は
花見の岡と云ふ処あり親鸞上人の旧跡と云ふ
石表ありて傍に池あり親鸞身を投ぐる所
かりと云ふ

又東一里は壺村と云ふ所は頼朝の墓あり
高サ四尺余碑文ありまとも文字ささくぢぢ
新田はむる東の方一里は廣き原あり尾
堤と云ふ

芋かゝ新田 大野新田と云ふ小山へ一里十二町
小金井へ廿九町二十余戸五十斗り

喜沢

東に七八町程の森あり白打山と云ふ白鬚明神を
祠る社あり西のしゝ杉の森ハ鏡山王次は鳥居
ありハ愛宕かり西北は壬生街道あり是追分

かり小山まで十八町あり南に続きて松林を
公の法林なり

小山

間々田

野木

古河

清泊

四日

中田

栗橋

幸手

杉戸

粕壁

越谷

五日

草加

千住

九時前

東叡

清本坊

清着夫

月番

参政の邸

に至る

八時家

に帰る

附録

岩槻街道之記

壬戌九月ハ七月の水沔まで千住道ハ杉戸と幸手
の間一里半斗りの切戸出来て往來の旅人
を舟にて渡さす
清通なり難しとて

清出門ハ谷中より千汰木大観音の脇夫
より約込西々系飛鳥山の麓

王子 川口へ一里十町

十文

稻附

兼勝寺街道の西の方より太田道灌
の砦の跡有静勝寺道灌の法号木像あり

赤羽

岩淵

川口の渡あり

川口

鳩ヶ谷へ一里八町善光寺ハ川端より東の
二丁斗りよりあり森とある

十二月田

淵の爪

前田

中井

雄淵

辻村

鳩ヶ谷

大門宿へ一里

浦寺

新井宿

石神

新町

花盛也

行惠戸塚村

大門宿

岩槻へ二里十町

宿の入口より十二双権現の社あり釣揚の神明へハ
是より東半里よりあり

辻村

は辺柿の葉
紅よ漆む

大恵村

申の方八幡
の宮あり

上寺山村

東氷川明
神宮あり

上野田村

新漆屋

又法井
とも

膝子村

廣徳寺と
云寺あり

宮の卜村

綾瀬川橋あり草加へ出て隅田川へ
合を橋の名ハ箕の子と云ふ

箕輪坂

加倉村

東に佛龕山常用寺あり土人云信ふ昔百万
石程の城主之城と大也は不々大と云ふ

岩槻

紅大門へ一里半

城主大岡主膳正

宿の川は荒川より中嶋の如くして橋をるき二つ掛くけ川越谷

大沢の間に於て利根川（落る城）はけ川を形取て築く
木茂りて樹乃よりハスエと

按とるは鎌倉大草紙は長祿元年四月上杉
修理大夫持朝入道武州河越の城を取立つ
太田備中守入道ハ武州岩槻の城を取立つ
同左衛門大夫ハ武州江戸の城を取立つ
見えと

植草村 上野村

是より官道にて杉木の
並木左右より

表慈恩寺

裏慈恩寺村

此寺の境内四丁四方も有り
委くを編幸手の下に出る

藍の花村

鹿室

うのしろ
まろ鹿柄有り

紅葉大門

立場なり宿はハハと幸手ハ三里ハハ

下野田

一橋殿の竹林なり

上野田

西原

穀野

輪戸

古利根川橋より輪戸
橋と云小田系成なり

下野見村

西ハ瑞光寺有り

上高野村

板橋有り是より千住街道へ出る

幸手 下畧と

今年ハ九月十二日

涉發興にて十五日日光へは着夫より十八日直
は歸府にて廿日岩槻は泊なり昼のは小休王子

金輪寺にて何事も俄に故障ありて中里の
城官寺に浄入なり予々菩提寺なれば先き
行て彼見世話せしうとも田舎の多負寺といひ
殊よいつよなきに浄門主の浄成と同て住持ハ
何さまよ何さま物用の用よたゞをされとも
あやしく相済し也

大谷寺記畧 九月十三日宇都宮に泊の夜予を召
て仰り多々ハ大谷の観音ハ絶景の地なり
明朝早く出立して彼地遊覧いこし大沢

の内昼休まで参るへしとのちなり見り
依て曉七時旅舎を出て大谷寺といこる
宇都宮より
三里西北也大谷の道ハ宇都宮より日光へ曲る
一町程手前ハ大谷道といふ石表ある下よ
り西の方へ入る也向ハ養安寺と云一向宗
の寺あり岐路なり右ハ佐野への街道なり
左りの方西北ハ向ひ畑の間を行くハ廣
原に出る仲丸の原といふ古墳いくつと云数
を知らず其内充大なるを千人塚といふ昔

宇都宮合戦の時戦死の人の屍を埋——と云何の
頃の合戦と云ふを去るを薄の穂の白さう西の
林は傾く残月さうつらひ典の声さびさる野色
の景色何となく哀さを感じ懐古の情さうと
夫より鎧川を渡り荒張村と云ふ少なさ村あり
多氣山小は見え戸室山西南はあり多氣落城
のとき是より多く矢を射込——と也扇風岩と
云ふ崖の高さ岩ありと云手引坂はかる右の方
は堀あり草茂りて水あり大陀法師う豆の

跡と云ふ此手引山少なさ山なれと宇都宮
う砦の跡はもある——と土人いへりけ山一
は石也色白く軟う也け急の石を切出—
宇都宮麻沼邊まで瓦の代りは用ふ大谷
石と云ふ是なりけ山を小へ下るは大谷さの
あり出つ民家少くあり水の方西はよりて
一圓は絶壁なり西の方の山上は穴あり地
獄穴とも胎内くくとも云て出流山へ抜け
通ると云ふ又穴狭くして入る親り

孝なる人ハ易くと入るとと一丁程山を上
まとも至て難所と同さそ上夜もいま
明けを暗けま直ま立返して大谷寺
の門ま至る門の東ハ直ま絶壁ま作ま掛
けて甚奇なり天開山大谷寺とて坂東十九
番の札取まて上野の末なり門より入東の
方絶壁九丈余まも何る一圓ま石なり
岩穴数所何ま本堂ハ厩ま付て稍宏麗也
堂へ上り因帳を請ま住僧普門品を讀

ひ事一遍畢て帳を下の方へ引ま卸せハ文六の
千手観音直ま絶壁の石厩ま鏤付ま形相
誠ま奇絶なり前立まハ木像の二尺斗まなる
観音二軀何ま本堂より左りの方へ廊廡連
なりて同様ま石厩へ釋迦阿難加葉の像
を彫て何ま空海の作ま傍ま某師日光
月光を彫りて何ま又其傍ま木像の大黒何
ま又ま下ま八九寸の十二天の木像何り奥平
美作守宇都宮を領ま時舍茅熊三郎

寄進 りと也又其後の厓は三尊の弥陀
も彫てあり堂の前より左りの方の厓は
ハ凌霄花数株蔓を引きて升る事数
十仞甚奇覩なり傍は坂あり坂の左りは
鐘あり元禄中の銘也鐘樓も一の大石の上
に建てるもの也別當宅の前は池あり尊
菜を生と前の築山ハ尽く自然の石を削
りて造りたるなり小橋を渡り山は登り
一丁斗り行て下は石洞いそがわあり洞の向は立

石とて山を見まハ皆大石よて種々の形を
なり上はハ草木茂りけり山上も全くの
石也松樹生し大木ハなれども石山は生
る所皆百年を歴するものなり洞の端
は小屋あり水碓を掛く住僧云け三居る
且の下はも岩を堀て人家ありと俯て窺
ひんとせれども岩石の形おもしろく目
くるめきて見る事叶ハと正面は多氣山
聳之咫尺の間も有る如くなれども路迂曲

る所半里計ありけ山ハ宇都宮、根城也
麓より登まハ不動堂あり前ハ村もあり
頂ハ古城址の礎なり今ハ残ま西の方ハ
日光の白根の峯より鹿沼の辺までの山
々峯を連らねて打続く又小の方ハ徳
次郎の山見見え西ハ山厓の下ハ傍ひて稻
田の黄ぢりを見る是より洞ハといひて向の立
石より徳次郎の方へ出まハ道傍ハ種々の奇石
ありて名もさほくハ付まふりとなりけ洞を

御橋川と云ふ此所の眺望の景色黄大癡一幅
畫圖の如く誠ハ詞ハも筆ハも述かす只
洞水ハ清洲なせと流細く一体の境地セハ
くして假つゞ山の如くされとかる奇絶の景
地ハ又餘國ハも有へハも思しれを観音
を拜まらうらハ夜明渡り故け辺を歴
覧ハ夫より奉り来り道より左の方手引
坂を西南ハ見て下徳次郎の方へ出る河原
柵を過まハ左ハ高さ山あり羽黒山と云ふ

十月七日参詣と夫より韭塚の原より出て
西より小山を見る岩本の観音といふ又岩荒
村と云ふ所に立石として恐ろしい形の石立つと云
且続新田徳次郎新田是より下徳次郎の
本道より出つ大谷寺より下徳次郎までハ二
里也上徳次郎へ出る道ハ景色尤よろしけ
きとも險阻よて輪夫通行を厭ふ故是非
なく下徳次郎へ出より夫より大沢よまを
ハ午の時なり

此書甲子の夏繕寫を程なる人の為
に借失ひに依て再び敗麓に貯へり旧藁
を綴りて冊となせり前書に比ふは洩るる
事も何るへり失ひたる書の再び家へ歸
る事も何るへり補ふ事も何るへり

己巳孟蘭盆日

安長法眼識

庚午仲春二校了

東洋の書二冊

江戸の書

海防の書

東洋の書二冊

江戸の書

海防の書

東洋の書二冊

江戸の書

